

## まとめにかえて

サクライ ヨウコ  
櫻井 陽子

中川氏の報告「戦争と文学——表象としての深い絆——」は、近代・現代の社会状況を見渡して、一瞬にして日常を崩壊させる戦争はもはや国家間対立だけのものではなく、民族対立・宗教対立などによっても生まれていること、戦争だけでなく、大規模な自然災害までも視野に入ると指摘する。そうした現状がどのレベル、立場で切り取られ、文学作品として提示されるのかを見極めなくてはならない。戦争とは全く無関係な日常を細やかに写した作品にも、その語らない部分に読者は衝撃を受けることがある。そうした衝撃を掬い取れるような「読みのスキル」をあげることが必要であると力説する。また、戦争風景は時間の流れと共に風化して穏やかな姿に変貌していく。生々しい暴力性を補い続けるものこそが文学的想像力である。常に生々しい現場にひき戻し、告発し続けることができるものこそが文学ではないかと挑発する。

金氏の報告「近代日本における元寇図と〈蒙古襲来絵詞〉の図像の伝承」は、標題のとおり、「蒙古襲来絵詞」の図像の近代における影響の強さを指摘するものである。文永・弘安と二度に渡ったモンゴル軍の襲来は、中世日本人の国家意識や対外意識を覚醒させる大事件であったが、絵画化という分野からみると、その図像は一定しなかった。ところが、近代に入り、1890年に「蒙古襲来絵詞」が皇室に献上されて以降、元寇図が固定化されてくる。それまでは神風が主に取り上げられていたが、献上以降、特に矢田一嘯が取り上げた、河野通有兄弟以下が小舟で大きな敵船に敢然と挑みかかる場面が、アジア太平洋戦争

期における図像の固定化に大きく作用した。一方の神風は、現実の神風特攻隊にとって変わられていく。重苦しい歴史の流れを背景に、絵画表象の変遷と固定化の道筋を鮮やかに実証した。

大津氏の報告「端麗なる戦場——軍記物語のいくさの表象とその来由についての試論——」は、現実の戦場で繰り広げられた残酷な殺害、醜悪な死骸、腐臭に満ちた空間はヨーロッパの叙事詩などには充満しているが、『平家物語』には殆ど描かれていない。その理由を、二つの理論によって論証する。第一はオブジェクション（おぞましきものの棄却）である。軍記物語は本来、秩序を重んじる保守的作品であり、父権的象徴秩序の物語である。一方の戦場における傷つき殺されたおぞましい人体は穢れ（母性＝自然的本質）の象徴である。従って、周縁へと棄却されなければならない、描かれないこととなる。第二は、戦場を共同体の蘇生を図る儀礼である祝祭の場（晴れの競技場）としてとらえることである。軍記物語は共同体を維持するための装置でもある。この二点から、『平家物語』の戦場が、リアルな描写からは遠く離れて端麗に描かれることになったことが理解できる。

それぞれの専門領域に沿って取り上げた素材の懸隔は大きい、問題意識の重なる部分が多く、また、共通の話題も浮かぐ。

中川氏は戦争被害者たる人々が、実は無意識な戦争協力者となっていること、加害者と被害者が隔絶するものではないことをかぎ分ける必要性を示した。金氏は、近代絵画も押し寄せる時局の重圧に加担させられたが、視覚的效果は大きく、時代の価値観を人々に浸透させる力を発揮したことを示す。大津氏は軍記物語を必要とした日本の社会構造を暴き、軍記物語が人間と暴力について考えるための貴重な遺産であること、また、おぞましい戦場が描かれるのは近代になってからであることを示す。各氏の発言は、どの時代にあっても、個々の文学・美術作品が単体で屹立するものではないこと、社会的存在であることを、今更ながら教えてくれる。

討論では様々な質問や意見が出されたが、報告者を横断する問題が提示された。一例を示すと、金氏の報告にあった、神風ではなく河野兄弟の活躍がもてはやされていたことについての質問。それに対しては、個人の活躍に焦点をあて、敢闘精神を称揚し、武人として戦うことを精神体系として喧伝しようという国家意識を表象化したものではないかという発言があった。これは近代国家の中で軍記物語が国民教育のために使われてきた歴史とも軌を一にする。「武士道精神」なる考え方で『平家物語』を説明しようとする論調が近現代には蔓延していくが、『平家物語』に残酷さが描かれなかったことが、潔い武士像を都合よく幻想させることができたためでもある。

また、金氏が示した絵画の効果について、国家意識をビジュアル的に喧伝するための展示の力、展覧会の存在についても質問があった。展覧会の見せる、教える教育効果には戦争画にとどまらない問題が潜むことが明らかにされていた。

討論を通じて、提言すべき方向も見えてきたように思う。いくさ・戦争・戦場の表象について、時代・ジャンル・作品を問わず、そこに働く様々な力学を探るための不断の努力が常に必要とされる。それは地道な検証作業であったり、比較研究であったり、読みの試みであったり、方法は様々であろう。同時に、一旦生まれ出た作品は、読まれ、見られる時代や社会と連動して生き続けることも大きな問題となる。特にいくさ・戦争の表象は、危うい時代に翻弄され、利用されてきた歴史がある。その苦渋を踏まえて、研究者は自覚的に、ある時には批判的に、声を大にして発信し続けなくてはならない。

最後に、絶望的な未来に向けて文学がなし得ることとは何かと問われた中川氏の、文学の力を信じたいという発言には強く力づけられた。作品を生み出す作者、生み出された作品だけでなく、作品を読む読者の姿勢を、社会の中で観察・分析していかななくてはならないことにも気づかされた。現代において、読みのスキルの低下が問題となっていることも問題とされた。読みのスキルを磨き続けるのが研究者であり、読みを導くのが研究者の責務であろう。作品と読

者とを前にして、研究者として何ができるのか、問いを突きつけられたシンポジウムであった。